

第39回 東京芸術文化評議会 速記録

- 1 日 時 令和7年4月23日（水曜日） 11時01分から12時05分まで
- 2 場 所 東京都庁第一本庁舎7階 大会議室
- 3 出席者 青柳評議員、片岡評議員、コシノ評議員、是枝評議員、妹島評議員、
芹澤評議員、日比野評議員、松任谷評議員、宮城評議員、山田評議員、
小池知事
- 4 議 事 芸術文化都市・東京の進むべき道

5 発言内容

○青柳会長 それでは、ただいまより、第39回東京芸術文化評議会を開催したいと思います。

皆様、お忙しい中、大変、御出席いただきありがとうございました。

本日は、会場の座席表に従って、五十音順で御紹介申し上げたいと思います。知事の左側から時計回りでよろしくお願いしたいと思います。

まず、片岡真実評議員です。

○片岡評議員 （一礼）

○青柳会長 コシノヒロコ評議員です。

○コシノ評議員 （一礼）

○青柳会長 是枝裕和評議員です。

○是枝評議員 （一礼）

○青柳会長 妹島和世評議員です。

○妹島評議員 （一礼）

○青柳会長 芹澤ゆう評議員です。

○芹澤評議員 （一礼）

○青柳会長 日比野克彦評議員です。

○日比野評議員 （一礼）

○青柳会長 松任谷正隆評議員です。

○松任谷評議員 （一礼）

○青柳会長 宮城聡評議員です。

○宮城評議員 （一礼）

○青柳会長 それと、オンライン上で山田和樹評議員です。

○山田評議員 お願いします。

○青柳会長 最後に、本日の司会を務めさせていただく、青柳と申します。よろしくお願いいたします。

早速ではありますけれども、ここで小池知事から御挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

○**小池知事** 皆様、おはようございます。

今日が第39回の東京芸術文化評議会となります。足元がお悪い中御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。またこうやって皆様とお目にかかれること、大変うれしく思っております。

ちょっと振り返りますと、コロナの1、200日間、もう大変芸術やアート、ミュージック、いろんな面での活動というのはなかなか大変な時期であったかと思ひます。そういう中で、芸術に関係する皆様方が様々な形でお支えいただいてきたこと、大変うれしく思っておりますし、また、区市町村、大学、芸術文化団体、そのネットワークが育まれてきている、そして東京の文化施策、重層的に進化をしているところでございます。

ちなみに、いわゆるコロナ禍のその前と後で随分世の中は変わったと思うんです、いろんな点で。これはもう大きな変化ということで、私は勝手ながら、Before ChristのBCを、Before Covidというふうに整理しまして。じゃあその後は何かというと、いろいろ御意見はあるかと思ひますけれども、Age of Digitalで、ADの時代に入ったのかなというふうに思っております。

ただ、その中でも芸術が果たす役割は、Before CovidもAge of Digitalでも変わらないということでございます。

一方で、革新的な部分もございますので、伝統と文化、これが共存することが、東京の芸術文化の深みを増してきているのではないかというふうに思ひます。

また昨今、改めて江戸の文化が見直されております。浮世絵1つ取ってみましても、また循環型の社会という構造をとりましても、さらには船が大きな役割を果たしていたという、その時代の経済のシステムなどなど非常に深いものが数々ございます。今も息づくこの江戸の文化、発信をしながら、多彩な施策を進化させて、東京のプレゼンスを一層高めていきたいと考えております。

今日でございますが、芸術文化都市・東京の進むべき道ということで、皆様方の御議論を賜りたいと思っております。どうぞ忌憚のない御意見を頂戴したいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひを申し上げます。ありがとうございました。

○**青柳会長** どうもありがとうございます。

それでは、次第に沿って進めてまいりたいと思ひます。なお、本日の議事は公開とし、後日、資料や議事録を公開することになっております。

では、まず、今知事がおっしゃったように、議事は芸術文化都市・東京の進むべき道についてでございますので、まず、事務局のほうから説明よろしくお願ひいたします。

○**文化振興部長** それでは、お手元のタブレットを御覧ください。

都は、東京2020大会やコロナ禍での知見・経験を踏まえ、東京文化戦略2030を

令和3年度末に策定し、この間に構築してきました様々なネットワークをベースとして、助成メニューの拡充や若手活躍の場の拡大などを行ってまいりました。今後も、各方面における施策をより充実させてまいります。

今後の施策の検討をより効果的に進めていきますよう、令和6年度において、都民及び芸術文化団体等を対象としました意識調査を行いました。若者の芸術文化鑑賞割合が大幅に増加するなど、これまでの文化施策の一定の成果を確認できました。

予算についてですが、国がほぼ横ばいであるところを、都につきましても、10年間で約2倍近い増となっておりまして、予算に占める文化予算の割合につきましても高くなってまいります。

一方で、国内外のアーティストによる東京への評価は、まだ高いとまでは言えない状況でございます、さらなる取組の充実が必要な状況でございます。

今後の施策の展望について、順を追って説明いたします。初めに、子供やインクルーシブの観点の取組についてです。文化体験を通じまして、社会全体で子供の感性や他者との関わり方を育み、豊かな育ちを応援するため、子供・若者の文化体験の司令塔となるセンターの機能を整備するほか、鑑賞サポートの充実により、あらゆる人が芸術文化を楽しむ東京を目指してまいります。

続きまして、東京国際芸術祭の展望についてです。芸術文化プロモーション部会における検討状況を踏まえ、今後、点在しているイベントを一体のものとして構築していくとともに、目玉企画の実施や効果的なプロモーションの検討を進めていく予定です。これらを確実に進めるためにも、実行委員会を立ち上げ、機動的に準備していきたいと考えております。

プロモーション部会での検討状況につきまして、本日御欠席の部会長の秋元評議員に代わりまして御報告させていただきます。

部会におきましては、他都市の国際芸術祭と差異化を図り、目標・成果を明確にする。お台場トリエンナーレの後継イベントについても、メインイベントとして組み込んでいくべき。既存イベントの寄せ集めではなく、幅広い認知を得るための仕掛けを打つ。部会メンバーのアイデアなどを実施・主導する実行委員会を設けるべき、などの御意見をいただきました。

また、東京国際芸術祭の核となるトリエンナーレ後継の国際的美術展につきましては、名称、会場を見直し、これまで支援してきた若手アーティストの活躍、東京の芸術文化の海外発信、多くの人にアートを楽しんでいただけるような場を目指してまいります。

続きまして、都立文化施設の集客力の向上についてです。現代美術館においては、令和6年度の来館者数が過去最高の75万人を達成するなど、大きな集客力を発揮しています。都立文化施設における指定管理者の指定期間が満了した後も集客力を維持・向上していくため、指定管理者の選定等について検討してまいります。

続きまして、アーティスト等担い手の支援についてでございます。アーティストやキュレーター等の人材バンクデータベースの構築や、アーティスト等の就労支援により担い手の育成支援を進めるほか、世界クラスの映画人材輩出、創作環境の充実、アートマネジメント人材の育成を進めてまいります。

続きまして、世界に発信するハブ機能の形成についてです。東京に集積する多様な文化資源を結びつけ、世界に発信するハブ機能の形成を目指しておりますが、拠点で活躍するアートマネジメント人材や若手アーティストを育成するとともに、ネットワークの形成等を進めてまいります。

最後に、江戸文化の発信についてです。新たに立ち上げた江戸文化の魅力発信部会における御議論を踏まえ、江戸文化発信の旗印となる新たなロゴマークを活用し、江戸博リニューアルの機を捉えたPR展開を実施してまいります。

以上、駆け足ではございましたが、今後の各施策の展望につきまして御説明させていただきました。よろしくお願いいたします。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、今の事務局の御説明などを基に、評議員の方々から御意見をいただきたいと思っております。全体で40分程度ですので、できたら2回転ぐらいさせていただきたいと思っておりますので、そのお考えの中でお話しいただきたいと思っております。

恐縮ですけど、最初に、また片岡評議員からよろしくお願いいたしますでしょうか。

○片岡評議員 はい、よろしくお願いいたします。4点コメントさせてください。

1つは、東京国際芸術祭というふうに全体をまとめられようとしているのは大変すばらしいと思っておりますけれども、これを英語で何と言うのかというところで、以前から申し上げているように、Tokyo Art Seasonなのか、Tokyo Art Monthなのか、ある時期に集約をしているということが伝わる必要があるかなというふうに思います。

それから、2番目は、トリエンナーレの後継についてですけれども、主要な美術展になると思っておりますので、メインイベントに位置づけるべきだというふうに思いますけれども、若手の発信の場というだけで、なかなか集客力が弱くなっていきますので、集客力のある、名のあるアーティストのプラットフォームを作って、そこに若手を乗せていくというような構図が必要かなと思います。併せて、名称も検討すべきかなと思います。

それから、3つ目は、アートコーディネーターの部分なんですけれども、これはキュレーター以外のコーディネーター、プロジェクトマネジメント、さらにはファンドレイジングや広報をやるような、多角的な専門家を育成していく必要があります。なかなかそうした人材を育成しているところがないということもありますので、できれば育成講座のようなものを東京都が主催をして、そこで優秀な人材を実際にこのトリエンナーレなどに採用していくというような、そういう循環構造が生まれてくるのが理想的なんじゃないかなとい

うふうに思います。

それから、最後、江戸のところですけども、日本のこうした伝統文化は非常に海外からも人気がありますけれども、昨今のそのインバウンドの急激な増加ということを視野に入れたときに、江戸だけではなくて、やはり江戸と東京という、先ほど知事がおっしゃったように、過去と現代の文化がつながっているのだというところがもう少し前面に、江戸だけではなくて、前面に出てくるといいんじゃないかなというふうに思いました。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次に、コシノ評議員よろしくお願ひします。

○コシノ評議員 私は、東京都ネクスト・クリエイション・プログラムの「こどもファッションプロジェクト」監修をお引き受けするにあたり、子供の豊かな感性を育むため、子供たちだけで作り上げていくファッションショーというのを提案いたしました。その状況を写真で見ていただくと、もう、どれぐらい若い子供たちが楽しんで参加したかということがお分かりいただけたと思います。

2024ネクスト・クリエイション・プログラムという題名、このロゴも私のほうでデザインさせていただきました。

実際にコレクションを開催するということになると、デザイナー、モデル、カメラマン、映像カメラマン、スタイリスト、ジャーナリスト、ヘアメイクアーティスト、演出進行と、これだけの人たちがこのファッションショーの中に関わっているわけです。それぞれの職業のプロをお願いをいたしまして、もうこれはずっと付き合ってきた友人たち仲間たちをかき集めまして、それぞれのコースで募集した子供たちに対して教育していくわけなんですけれども……。

まず最初はデザイナーを作り上げていくため、デザイン画を提出してもらって募集いたしました。参加の子供たちはもう皆さんそれぞれ個性が豊かで、決してうまいとか下手とかいうのではなくて、それぞれの子供たちの個性を生かすということを中心に考えながら、作ってみたい洋服をデザインしてもらいました。その子供たちのデザインを具現化していくには、我々の会社の専門家たちが最終的に実物を作ることになるわけですけども、それまでに絵を描いたり、生地を選んだり、そしてピンワークをしたりとか、とっても楽しそうでした。

一番子供たちが喜んだのは、我々が持っている在庫から大量の素材を目の前に置いて、この中から自由に選びなさいということで選ばせた時です。そこで、自分たちのデザインを表現するためには、どの生地を使って、どうして表現していくかということをお教えします。そして、出来上がった洋服をファッションショーでモデル志望の子供たちに着せるわけですけども、最後のフィナーレには、このデザイナー志望の子供たちと、その子のデザインを着たモデルの子供たちとが手をつないで出てくるんですけども、これが子供たちにと

ってはとても感動なシーンだったと思います。

そして、このファッションショー実現に向けて、みんなの気持ちが1つになれるようにということで、実はユニフォームを作りました。「NEXT CREATION PROGRAM」というロゴを胸にぼんと書いた黒地のTシャツなんですが、もう大人から小さい子供たちまで全員このユニフォームを着せて、そしてショーの終了後壇上に集まったときは、総勢で150人ぐらいが集まって壮観でした。

例えば、カメラマン志望の子たちは、カメラを持たせた途端に、まさにプロが写真を撮っているような格好で動くわけです。ジャーナリストの子たちは、一人一人にいろいろ質問をするんですけども、その質問がだんだん的確になってきて、へえ、というような取材をしていました。プログラムを進める間に、子供たちがどんどん成長していくという、その跡がもう目の前に見えるんです。御自宅に帰られて、親との付き合い方までが何か変わってきたというようなことも、後になって保護者の方から教えていただきました。

これを成功させるために、取引先であるユニフォーム会社がTシャツを全部提供してくれたとか、それからファッションショーのリハーサルや本番日にはお弁当が必要なので、そのお弁当を全部提供してくださったりとか、子供の今後の将来を考えて、大人たちが愛情を持って付き合ってくれる姿を私も体験しました。そして同時に、子供と実際に付き合うことによって、私自体が大変勉強になったんです。ものを作るときには、常に子供たちと同じ目線で考えられるぐらい、新鮮なクリエイションをやっていかなければいけないなと、これが私にとっては非常に勉強になって、ありがたいことだなと思うことが多々あったんです。

そんなことで、初年度の「こどもファッションプロジェクト」が大成功いたしましたことを、ちょっと御報告させていただきました。ありがとうございました。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次に、是枝監督お願いします。

○是枝評議員 はい、是枝です。よろしくお願いします。

3点あります。ネクスト・クリエイション・プログラム、コシノさんの取組も参考にさせていただきながら、今年、子供たちと映画作りというのをやることになりました。もちろん制作に至るまで、むしろ中心は実はリテラシーのほうで、どういうふうに映画というのが作られていくのか、作るときにどんなスタッフが必要なのか、そういうことに触れていただく機会をつくっていきたいなと思っています。

本当に、今コシノさんのお話の中にもありましたけども、子供から学ぶことがすごく多いので。僕もこの15年ぐらい、その子供の映画作りに立ち会ったり、校長先生のようなことをさせていただいてきましたけれども、関わる大人のほうが学ぶことが多いなというふうに思ってるので、そういうイベントになればいいなと思っているのが1つと、なかなか映像リテラシーというのは手つかずで放置されてきている部分で、海外だと学校教育の中

でしっかりと、やっぱり今これだけフェイクの情報にあふれている中で、子供がどういうふうに情報の取捨選択をしていくかというのは、すごく重要な課題だなと思っております。

なので、こういう取組を積み重ねながら、個人的には、将来的には学校教育の中で、公教育の中で映像リテラシーをどういうふうに教えていくかということに発展していくような、そんなきっかけになればいいなというふうに考えています。

2点目、これはタレント・トーキョーなんですけれども、すごくこれを評価する声が大きいです。映画の業界の中でも名前が浸透してきています。この出身者である、今回でいうと、5月に開催されるカンヌ映画祭でコンペティション部門にノミネートされました、早川千絵さんもこの出身で。アジア各国でも、やはりタレント・トーキョー経験者というのが、結構、今活躍を始めています。

ぜひこれを拡充、より拡充していただいて、多分今年から始まると思いますが、ネットワークを作って、ここの卒業生をどういうふうにサポートしていくか、次回作、その先、そこまで視野を広げたサポートというのをぜひ続けていただけたらなというふうに思っております。

3つ目、これが実は大きな課題として残っている部分なんですけど、生活文化局ではないんですけど、東京国際映画祭、新しいチェアマンになって3年か4年がたって、かなり今までなかった哲学が生まれつつあります。映画祭はこうあるべきだということは打ち出しているんですけど、なかなか予算がまだ足りていない、人材が不十分である。

あとは、もともとこれは渋谷でやっていたイベントが六本木へ移り、今、有楽町に来ているんですけど、なかなか拠点が定まらないというのがあるんです。この辺り、もう少しサポート体制が充実してくると、今度スタッフが継続して育成できる、哲学が継承されていくという、本来の映画祭のあるべき形というのが多分育まれていくと思うので、この辺り、部局は違うかもしれませんが、都として全体として、ちょっとサポート体制を見直していただけるとありがたいかなというふうに考えております。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、次に、妹島評議員よろしく願いいたします。

○妹島評議員 2点、お話しさせていただきます。

1つは、集客力の向上についてですが、昨年度、この評議員会でグランドデザイン、回遊動線、それから迎え入れるファサードを作るということを、いろんな方と話し合いながら進めていきたいというお話をさせていただきました。

それで昨年度、まず、庭園美術館の新しいファサードを作り、人々を迎え入れるということについて「ウェルカムゾーン及び東屋等整備に係る検討委員会」を立ち上げました。そして、大切な美術館を開きながら、同時に守っていくことの大切さ等について話し合い、それに基づき、基本構想をまとめました。

本年度は、基本設計と実施設計を行う予定です。お示ししております図のピンクになっている東屋ゾーンと、ウェルカムゾーンが目黒通りから緑の向こう側に見えて、お客様を迎え入れる空間になります。

さらに、建物と庭が1つになっていることが、東京都庭園美術館の非常に重要なところだということを改めて確認しました。その全体を体験できるように、基本的にはメインの玄関から入って、新館、旧館の間から出て、庭を1周して帰ってこられる回遊動線を考えました。建物と庭が1つになって、庭園美術館でしか体験できないような、そういう空間を作れるのではないかと考えております。

現在、新館と本館をつなぐ連絡通路に扉を設け、庭園へとつながる道をつくる工事を行っています。

それから、一部非公開エリアがあるのですが、朝香宮様が当時どのように過ごされていたのかということをご興味を持たれるので、中に入れなくても扉とか窓から少し見るとか、そういう機会を作れないか、そしてそのための整備をさらに建物の保存にもつなげていけるのではないかと考えております。

それから、2点目は、創作環境の充実ということですが、現在東京には世界的に見て価値のあるすばらしい小住宅がたくさん存在しています。それらは戦後に個人の建築家たちによって設計された庶民の家です。良質な住宅建築がこれほど今の都市の中に残っている町というのは世界的に見ても珍しいです。

先ほど江戸からというお話もありましたが、昭和ですけれども、それが現代の都市空間の中に混じり合って建っていて、すばらしいものだと思います。ただそれらの住宅はみんな民間のもので、現在高齢化という問題に直面しており、壊さないで残すということがなかなか難しくなっています。それをどうやって保存しながら使っていけるかということは今考える時だと思っています。

例えば創作環境のためのスペースとしてなど、保存しながら新しい使い方を考えて、東京の、そして日本の財産を継承してみんなで守っていければ素晴らしいと考えております。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは次に、芹澤評議員、よろしくお願いいたします。

○芹澤評議員 皆様、おはようございます。

私も3点ございまして、まずは既に進行中のプロジェクトの中に、子供のためのいろいろなことが入っているというのを大変評価したいと思います。最初のときに指摘申し上げたことが具現化されていて、大変いいなど。

コシノ先生、このファッションショーのほうも本当にお疲れさまでございました。

コシノ先生のお話を聞いて、とても、本物に触れる、また本物の作り方を子供たちが触れることができていると思ったのですが、ちょっと心配だったのが、それ以外の鑑賞の

ところとか、何か子供事業、子供事業ってちょっと力が入り過ぎていて、もう少し肩の力を抜いて、もう本物の、ただ芸術に、子供は感性を持って生まれていますので、あんまり編集してしまわないで、子供向けに。ただ本物にもう触れさせて、逆に先生たちが子供たちの反応とかから学ぶぐらいにしたほうがいいのではないかと。

逆に、ただそこでメインになるこのところは押さえておかななくては、というところだけを教えられるような、やはり小学校の教員の質の問題もあるかと思いますが、そういったことができる先生たちに少しリフレッシュ授業とか、先生たちを少し養成していくのが良いのではないかなと思いました。

それから2点目は、若手アーティストの育成とか支援とかなんですが、ちょっと気になったのがやはりこの「就労支援」と言う表現がちょっと。この言葉上だけなのかもしれませんが、確かに若いアーティストは本当に食べていけただって大変ですし、それはもう昔からの話で、やはりモンパルナスでもみんなおなか空かせてうろうろしていたわけで、藤田嗣治さんでも、誰でも。

ただ、どちらかという、何が学べるかなと思ったのが、ベルリンはボンから首都機能に移したときに、ただ政府の町になってはいけなくて、退屈な町になってしまっただけではないということで、まずは東西統合したわけですので東側に結構社会住宅とかいろいろ残っていたらしくて、そういったものを無料で、期間は限定ですけども1年ないし2年、3年と若手アーティストに無料で貸し出して、そこで制作活動をして良いと。世界中から若手アーティストを呼び入れたと。

やはり東京で、大変、東京の町は今、世界的にインスタグラムとかでも本当に若者に人気がありますけれども、住んで何かしようとしたらお高いわけなんですね、やはり。円安であっても。なので、先ほどのお話しに出た価値ある住宅ですとまずいかもかもしれませんが、絵具とか飛んでしまったとかということがあるかもしれませんが。

でも本当に、例えば、なんですけど、再開発の事業の間、数年間だけ空いているものとかそういったものもあるわけで、それを都が借り上げて、アーティストたちにも、きちんと期間が終わったら出るというお約束をさせて、そこに住んで、クリエイトもできるというような空間を用意するのが一番良いのでは。「就労支援」よりはそっちのほうが助かるのかなと思いました。

それから3つ目は、江戸文化というお話でしたが、世界での「江戸の研究者」というのは実はかなり存在していて、検索すると色々な論文だって出てきますし、そういった世界中の江戸文化の研究者をネットワーク化したら面白いのではないかなと。

私も個人的に、友人で、昔の方なので御存じないかもしれませんが、なだいなだという作家がいましたが、その次女がフランスで数学者なのですが、江戸の数学、算数の研究者として博士論文を書いたりしています。そういった、様々な人たちが江戸という切り口で世界中で活躍しているので、そういった方々を今後ネットワーク化したら面白いのではな

いかなど。

最後は、これは意見ではなくちょっとリクエストなのですが、数年前にこれも少々関わらせていただきましたが、SusHi Techというプロジェクトを都知事が立ち上げて大変な人気になっていると思います。

もう、来月行くのだけど、と言うメールが沢山、私にも来るんですけども、そのSusHi Techに来る起業家たち、アントレプレナーたちは、やはり今まだ名の売れていない、これから売出しの若手アーティストの、例えば制作場所に見学に行きたいとか、会ってみたいとか、そういったリクエストがすごく多いのですけれど、私も専門家ではないし、そんなに存じ上げないし、何かSusHi Techで若手芸術家を紹介するコーナー又は、そのような情報だけでも聞けるちょっとした「アートデスク」みたいなのを置いて、つなげるような活動ができると、本当にまたさらに広がるのではないかなと思いました。

以上でございます。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、日比野評議員、よろしくお願いします。

○日比野評議員 よろしくお願ひいたします。

議事の芸術文化都市・東京の進むべき道ということで、東京の特徴の大きな1つである多様性、様々な価値を持った人たちが集まってきているのが、東京の人の特徴であり、その多様性があるが故に生まれてくる文化を育成していくのが東京の進むべき道だと思えます。

その中で今年デフリンピックが行われて、東京藝術大学と東京都でデフリンピックの文化プログラムとして、「ろう者における音楽とは?」をテーマとした舞台を東京文化会館で11月に行います。2年前からいろいろ準備を進めております。聴文化とろう者の文化があるんだということを七、八年前に知りました。その中で、ろう者と出会うことによって気づくこととは、たくさんあります。今度行う文化プログラムも、ろう文化と聴文化のコラボレーションということで、互いの文化を認め合う、尊重し合う、気づき合うというプロセスを大切にしながら進めています。東京藝大としても新たなチャレンジとして芸術文化の価値とは?という評価の仕方の研究をも、このデフリンピックの文化プログラムの中で始めました。

今日の資料の最初の表にもありましたけども、数値で計ることができる人口、予算などは、はっきりと分かるものもありますけれども、文化の評価は数値だけでは計ることはできません。このデフリンピックの文化プログラムの中では、自分たちがプログラムをやる前の気分、そしてやっているときの気持ち、そしてその後、できた後のプログラムに接することによってどのように自分たちの気持ちが変わっていったのかというプロセスの中での変化の様子を様々な方法で集めて、それを評価として活用していく参加型評価というあらたな手法に取り組んでいます。また、東京藝大では文化的処方という視点を開発してい

ます。文化というものがいかにウェルビーイングにつながるかということ立証していく。このようなことのベースとなっているのは、東京都と東京藝大とで2013年にスタートしたTURNプロジェクトでした。

あれから現在もTURNプロジェクトは続いており、異なる背景の人たちの中にいろんな文化があるんだ、福祉施設も違う価値観を持った人たちと出会うことができるという見方をすれば文化施設なのではないだろうか、、、？。そんな活動の延長線上に、今回のデフリンピックの文化プログラムを位置づけています。

きっと外国の方々が日本に来られるというものも、心を癒やしに来る、文化と接しに来ています。ということは、彼らにとってはきっと日本の文化芸術が文化的処方になっているのではないだろうかと思えます。

日本の文化、芸術というものがいかにウェルビーイングに機能しているかということの評価し発信するかが、社会から文化、芸術に対してより多く支援を促すことになり、文化芸術が社会的課題に対し、様々な解への道を導き出していくのではないかなと思っております。

以上です。ありがとうございました。

○青柳会長 どうもありがとうございました。

それでは、松任谷評議員、よろしく願いいたします。

○松任谷評議員 よろしく願います。

秋元さんが今日はいらっしゃらないので、プロモーション部会のことをあまりちゃんとは話せないんですけども、部会では毎回上がっているのは、ちゃんとリアリティを持って全て現実的なことにしましょうという、どこから始まってどういうことをやって、目玉的などをどういうふうにしてという話をいつもしているように思います。

アートって誰でももう国民全員興味は持っていて、温度差はもちろんあるだろうけれども、基本的に心の隙間というか余裕というか、そこに入り口があるわけで、僕らがディスカッションしなきゃいけないのはスペースが少ない人がどうやって心のスペースを作っていくか、芸術というと硬いですけども、何か入り口のスペースを広げていくかということなんだと思うんです。

そのためには、何らか僕らが果たす役割はあって、こういうイベントが始まる、こういうイベントがずっと継続している、毎回テーマがあるなんていうことで、あ、そうか、こういうのがあるんだという認知をするだけで、入り口は少しずつ広がっていくような気がしていて、そのためのミーティングを続けていきたいと思っています。

個人的にこれから、部会も含めてディスカッションしていきたいと思っているのは、今やっぱりアートって誰でももうある意味発信できるようになっているこの時代なので、どこまでアートというふうに認識したらいいんだろかなという。過去のものややっぱり新しいものが違うはずで、何かやっぱりある程度の広げる枠でこういう新しい提案、これもア

ートという、そういう提案なんかも何かできたらいいなと思っています。

前回提案させていただいた24時間オープンのスペースを作っていただいたので、これからもう本当に24時間、誰でも発言してもらって、何かそこで本当に現実的にいろんなプランが立体的にできていくといいなと思っています。

以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

それでは、宮城評議員、よろしく願いいたします。

○宮城評議員 はい。宮城です。

僕は大きく言えば2つ、1つはアジアの都市間競争の中で、東京はやっぱ芸術と言えど東京だよねというふうに認識してもらうのが大事かなと思うんですけども、パフォーマンスアーツの若いアジアのアーティストたちが、ともかく東京に行かなきゃなとみんなが思うような町にしたいなと思うんですよ。

そのためには2つハードウェアが必要で、1つは稽古場。でもこれはスタートボックスのほうでとうとうパフォーマンスアーツの稽古場に使えるところが誕生するというので、これはもう解決が始まっていて、もう1つはいわゆるレジデンスで、これはあんまり本当に民間でほんのちょっとはありますけど、アジアのパフォーマンスアーツのアーティストが泊まれるようなアーティストレジデンスが東京都の中にできるといいなと思います。

常時、パフォーマンスアーツの面白いところは、例えば演出家がアジアから来ると必ず日本にいる若いアーティストと一緒にやらなければいけないわけですよ。1人では何も作れないので。そこで必ず交流が生まれる。新たなジャンルといいますか、フィールドが広がっていくので、ぜひそれは東京都にできるといいなと思っています。

もう1つは子供のことで。さっきもファッションショーは本当にすばらしいなと思いましたが、演劇もまず子供が参加するという方向と、もう1つは子育て世代が劇場に行けるという、この2つを考えるべきかなと思っています。

ほかの国と比べて、あるいは日本のもう何十年前と比べて、やっぱり今子供を育てている世代があまり元気じゃないという感じがどうもしてしまうんですね。ほかの国に行ってもこの国は元気だと思う国というのは、大抵、子育て世代が、あるいは現役世代と言っていいかもしれないけど、何か元気なんですよ、そういう世代が。

子育て世代が元気になるために、2つ具体的な方策として考えられるのは、1つは子供がいると劇場に行けない。子供がいるとパフォーマンスアーツを見に行けないよねというのがやっぱりまだまだ非常にあるんですね。託児というものはあるんだけど、それは若干ネガティブな、親にとっては、本当は何かこういうのを自分たちでやらなくちゃいけないの申し訳ないけどというような、ちょっとネガティブなところがあって、それをポジティブにしていく。

つまり、子供たちを預けることで子供たちも楽しむんだというふうな考え方のそういう託児、つまり託児自体がパフォーマンスアーツになっているような場所、そういうものを劇場と併存させることによって、親は芝居を見ている、子供たちは託児でパフォーマンスアーツをやっているというふうなことができれば、劇場に行く現役世代が増えるんじゃないかな。劇場というか、パフォーマンスアーツを見に行く現役世代が増えるんじゃないかなど。

あともう1つは本当に素朴なことですけども、子供がいると入場料を4人分とか3人分とか考えると、高くて行けないよというのも現実にあるわけなんですよね。子供を連れて行くと高いよねという。そういう意味で、むしろ子供がいるほうがかえって安くなるくらいの、大人2人で行くより子供を連れて3人で行くほうがもっと安く入れるよくらいのことになると、子供を育てていると得じゃんみたいになるんじゃないかなと思って。今、やっぱりちょっと負担というか負荷になっているので、子供いるってすごい得なんだよということを、何かうまくアピールできると面白いなと思ったりします。

3つ、東京芸術祭、本当に拡充していただいてとても頼もしく思っていますけど、この先テーマエリアみたいなのを毎年設定したらどうかなと思ったりもして、今まで文化施設が集約されている場所がどうしても一番にぎわうということになるんだけれども、パフォーマンスアーツというのは本当はどこでもできる。例えば神社の境内とかお寺とかでもできますよね。

それこそ江戸の歴史のあるところ、例えば宿場町とか、千住とか板橋みたいな比較的あまり今まで文化施設が集約していないような場所、こういうところには古いお寺もあったりするじゃないですか。そういうところをうまく活用すると、今年はどこどここのエリアがパフォーマンスアーツで盛り上がるよと。来年はどこどこだよって。そういうふうに東京都の中の今まであんまり文化と関係ないなと思われていたところが、いや意外に面白いんだよ、歴史もあるんだよというふうになるといいなと思います。

僕からは以上です。

○青柳会長 ありがとうございます。

最初に2回ほどお話しいただくと申し上げたんですけども、ちょっと時間が足りなくなってしまったので、ここだけは強調しておきたいという、特に御意見はございますでしょうか。

○妹島評議員 よろしいですか。

○文化振興部長 会長、山田先生の御意見をお願いします。

○青柳会長 すみません、山田先生、忘れていました。ごめんなさい。どうぞよろしくお願い致します。

○山田評議員 いえいえ、すみません、ありがとうございます。

ちょっと漠然とした話からなんですけれど、芸術文化都市・東京の進むべき道というお

話で、資料にもいろんなことが行われているということは、当然とても素晴らしいと思うんですけど、その先にどこに、理想像がどこにあるのかなというのが共有する、スローガンのなものでもいいんですけど、言葉的なものであるとか、イメージ的なものであるとか、平和な社会なのか、戦争のない社会なのか、子供たちが集う社会なのか、そこら辺に向けてというゴールが少し見えていたほうがイメージしやすいのかなと、ちょっと漠然に思いました。

芸術文化都市ってどう、我々も文化・芸術ってセットにして言葉を使うことが多いんですけど、芸術を例えば、芸術って何なんだ、都市って、文化って何なんだとなかなか説明しにくい、一言では説明しにくいところもあって。

芸術というのは英語に訳せばアートとなるんですけど、外国人が言うアートというイメージと日本人が使う芸術というイメージは必ずしも一緒じゃないような気がしていて、そこら辺をどう扱っていくのかなというような漠然としたイメージ、理想像のお話を1つしたかったのと、コロナ禍で、この会の冒頭に小池都知事がお話しになった、コロナ禍でアートにエールをとというものがあって、例えばアートにエールをで生まれた作品はアート作品なわけなんですけれど、そのアート作品、生まれたものがどこに行っちゃったのかな。どこかにはあるんでしょうけれど、それをもっと生かす方向はないのかなと思ったりもしました。

コロナ禍のお話ですと、本当に都知事の一言ってのはとても大きいなと思ったのは、コロナ禍のステイホームで、皆さんが家にいるときに、オンラインでも例えば東京都交響楽団が演奏会をオンラインでもしていますからみたいなことを1つ、一言おっしゃったことが、この業界にとっては物すごい話題になったんですね。ああ、都知事自らがそんなことをおっしゃってくださったんだとって、物すごい我々は、音楽家一同は歓喜にわいたような、そんな視点を持っていらっしゃる方が行政の長にいてくださるといって、とてもそれを心強く思って、本当にその節はありがたかったんですけども、その都知事のこの一言の大きさを、ぜひいろんな面に生かしていただけたらいいのかなと思って。

その生かす方向が、例えば今度生まれる東京国際芸術祭であるとか、そのときに都知事に先頭になっていただいたりしたら一番いいプロモーションになるんじゃないかと思ったりするんですね。

プロモーション部会の一員もさせていただいているんですけど、お話しいただいたときに、本当に今年から始めるのと、そのスピード感にちょっと驚いて、本当に今年から始めるのであればかなり急がなければいけないし、言ってみれば今の段階で正式名称も決まっていなわけですから、実行委員会を作るにしてもどうしていくのかなとか、なかなか急務、急がなければいけないようなことを感じています。

そして、評議員の皆さんから子供というテーマのお話もあったんですけど、本当に子供は未来とか希望を象徴する存在なので、とても大事だと思っていて、宮城さんもおっし

やっていたけれど、親が出にくいという声があるわけですから、やっぱり文化・芸術の総合的な目標というか、ある世代に限定する、スポットする事業があってもいいんですけど、結果的には子供がいてその親がいて、願わくば、そのおじいちゃんおばあちゃんもいて、3代そろってどこかに出かけるとか、どこかの集いに来るとかイベントに来るとか、そういうことになっていくと、いろんな芸術祭であるとか音楽祭であるとか、そういうことに生かしていけるのかなというようなことを思いました。

僕自身が、つくば万博ですよ。僕が子供の頃だからつくば万博に親子3代で行ったんですよ。やっぱり、そういうイベント的なもので人が集うということが一番大事になってくるのかなというようなことを思いました。

ざっと以上です。すみません。

○青柳会長 ありがとうございます。大変失礼しました。

今日、大変すばらしい御意見をいただいて、評議員の先生方に感謝申し上げます。

私も、今お聞きしていて、二、三考えたんで、ちょっとお話をさせていただきますと、やっぱり世界の大きな都市、大都市というのはどうしても社会のおりがどうしてもたまっていってしまうと、それが犯罪であったり、いろんな意味でおりがたまるわけですけど、それを攪乱して、おりをなくしていくための力として、どうしても芸術・文化の刷新性というものが非常に重要なんじゃないか。

そういう意味で、今日いろいろな評議員がおっしゃってくださった子供というのもの、世代を刷新する力を持っているという意味で、恐らく大変重要な役割をしていくのではないかという感じがしました。

それから、日比野評議員や片岡評議員がおっしゃっていた、アートもアーティストだけではなくて、その周辺の様々なコーディネーター等の人材育成が重要であって、これはどうしても必要で、例えば演劇などにおいても、ドラマトルクというような、日本にはまだ定着していない職業も、世界では定着がしつつあるということで、1つの分野でもどんどん分厚い関係者というものがようになってきているんだということ。

それが恐らくですね、早いときから、子供のときから、それぞれの分野で本物を知ってもらうということに大変重要なことではないか。

もう1つ申し上げますと、最近ですね、私、時々、都現美に行くんですけども、例えばこの間の高橋コレクションとか、それからこの間の坂本龍一さんの展覧会なんか、すばらしいものが、皆さんがそれを分かってくださって大変たくさんの方が来るようになっていく。これは恐らく30年ずっとすばらしいことをやってきたんだけど、ようやくその存在が知られて、それから社会の関心と都現美がやっている波長が最近合ってきたんじゃないかなということで、やっぱり続けるということが非常に重要なことだというような気がしました。

そういう意味では、例えば妹島評議員がおっしゃっていた庭園美術館の中をその回遊式の庭園を見ていただく。これは、実は知事もおっしゃっているんですけど、江戸時代の大名庭園がみんな回遊式なんですね。ですから、例えば後樂園の回遊式の庭園というものは江戸時代の回遊式で、庭園美術館は現代での回遊式ということにつながってくるということで、そういう意味でも東京都というものの都市としての歴史の深さというか、強さというか、それが出てきているんじゃないか、そういうことを感じながら今日、皆さんの御意見を聞いておりました。

どうも大変時間が押してまいりましたので、この辺で皆様の御意見をお聞きになった知事からお言葉をいただきたいと思えます。

○小池知事 すみません、妹島先生から一言。

○妹島委員 先ほどからアーティストの支援とかレジデンスという話が出ていますが、都営住宅の0.何%かでも、そこを、外国のアーティストのための短期滞在のレジデンスとして使うとか、若手作家にアトリエとして期間限定で貸与するとか、できたらいいのではないかと思います。それらは提供される側への支援になるだけでなく、その都営住宅が建つエリアに新しい風を持ち込み、そこに住んでいる住民にもさまざまな可能性を広げることになると思います。そして、面白い場所が出来上がってきます。

それから、先ほど、著名建築家に設計された家の今後の活用についての話が出ましたが、丁寧に保存しながら使っていくというのは難しいことですが、例えばそこでちょっとトークの会をやるとか、展覧会が開催されるとか、そうするとビジターはただ家を見学するだけでなくその家の空間を時間をかけながら経験できることになります。歩いてくるときにそのエリアの雰囲気と住宅の関係を感じることができます。そういうやり方で、ただ保存するのではなく、今の時間と共にみんなに開きながら残していけるのではないかと思います。

○青柳会長 すみませんでした。

今、妹島評議員がおっしゃったように、例えば幡ヶ谷の水道道路のところに、都営住宅の空いているところをアーツカウンシルが借り受けて、そこにアーティストに住んでもらって仕事をやらせよう、すばらしい空間になっていますね。その先の辺り、渋谷区が公衆便所をいろいろな建築家に1つずつ作ってもらって、あれは世界でもかなりすばらしい通りに、これから変身していくんじゃないかという感じがしますね。

それから、アーティストが住む家で僕はよくリヴィエラのコルビジェのカップ・マルタンの家へ、たまに見に行くんですけど、あれを見ると、コルビジェがこういうこと考えていたのかということが実によく分かった。そういう意味でも、妹島評議員のお話は大変面白いですね。

大変失礼しました。それでは知事、よろしく願いいたします。

○小池知事 とても、先生方のそれぞれのジャンルからのとても深い、また、気づきを頂戴するような御意見をたくさんいただきました。本当にありがとうございます。

東京を芸術のまち、そしてそれに誰もが参加できるまち、そして次の世代を育てていくまち、そういった芸術の深みと、そしてまた広い切り口でこれからもその大きな目標に向かって進めていかせていただきたい。また引き続き、御意見、アドバイスを頂戴できればと思います。

最後に、妹島先生がおっしゃって、また青柳先生も付け加えていただいた水道道路というのが、笹塚から幡ヶ谷それから初台のほうへ長く、あそこは何棟あるんですかね、都営住宅がずっと並んでいるところ、空き店舗がポコポコできているところに、そこにアーティストの方々に一定期間入っていただいて、そこから国際的な、何というんですかね、展覧会にそこから発信をされて賞をとられるとかですね、今、そういう形でモンパルナスとかソーホーみたいな形に、そういうまちに、まさにおっしゃったとおり進めてきておりますので、そこをより活用していくのも、またそういうことをやっているというのが1つの発信につながって、また新しい人を呼び込むことにつながるんだなというふうに思っております。

それから、ちなみに今日はちょっとお話は出ませんでしたけれども、例えば、今、有楽町の上のほうの高速道路が、あれを今、閉じて車が通らなくなりました。それは日本橋のあそこの街道の起点にぶこつな高速道路が乗かって、青空も見えないというところで、あれは長年の計画で高速首都高を地下に走らせるという、今、大工事をやっているわけです。

その結果、有楽町のところを新幹線と平行に走っている高速道路、不思議な区間がありますけれども、そこが車が通らなくなって、そして車の道ではなくて人が楽しむ道に変えていこうということをやっております。

もう、既にマラソン大会をやりましたし、いろんなイベントを、あそこは、新幹線が走って、すぐ斜めはソニービルで。もうすごいところなんですね、東京のど真ん中で。

ニューヨークのハイラインという昔の廃線、線路が通っていたところを、いろんなアートのインスタレーションをすることによって、ニューヨークの観光の名所になっていることから、このKK線を、スカイコリドーという名称で、これからいろいろそこで発信もしていきたいというふうに思っております。

それから、いろいろお話しいただいた中で、そうですね、コロナのときアートにエールを、あれでいろんな方々に送っていただいた作品、あれはきちんと保存していると思いますけれども、たしかMXでずっと永遠に流したんですね、作っていただいた作品を。

気合の入った作品は最初のロールから、とにかくすごく長いもので、大変な大作も送っていただいたんですけども、ルールを決めまして、とにかくたくさんいただいたので、

そうすると20秒間しか頭を取らないので、最初のスタートの部分で20秒間使って、あと全然見られなかったとかですね、そういった作品もありました。

照明さんとか、音響さんとか、アートに関わる方々は本当にたくさんの分野がありますので、そういった方々にもメールを送ることができたかなと思っておりませんが、引き続き、今日、先生方からお話しいただいた点で、まさに芸術の塊が東京だ、楽しいぞと、みんなで行こうよという、そういう流れをぜひこれからも作っていきたいと思っております。

いろいろと大きな変化などもございますけれども、引き続きの御協力のほど、よろしくお願いをしたいと思います。

本当に御協力ありがとうございます。お力添えよろしくお願いたします。

先生、ありがとうございます。

○青柳会長 小池知事、ありがとうございました。

これにて、第39回東京芸術文化評議会を終了したいと思います。

皆様、本日はどうもありがとうございました。

以上